けいせい傾文紙子

二之巻

目録

第一 男惚れた女郎に成子の浮名容色
風俗人の事り大旨なる事
分限と成る事
遊子なれども〳〵のゝね寄まが新つき
千歳の先うれたる事
第二 男世帯の新屋仕初出来る事
兄弟みして駕かゝる事
太の嫁こゞへの縁をとらむとせんと
前世の夫みわけてゝ
会者りひぢ抜

第三 男の云出さと云て見て元目の色

巧てのぶん中とへ神あつぬ方
起情の罰もわう眼の兵ごが双物
ぞんまのおもはとん安るゐ元ものく

第四 男同志の血判 紅の血の色

未練のあつわさらぬゐ元のん極
死像かてけの俗ちらて寄人
大事九企百十余人一統の連判

第五 男もあつぬ女の覚悟 紅色

元逼人の世ぬと垣根のいまわ
縄ゆを加つふもうらぬ始末
入ると云始の著子ゐ自害

第一 男僧うち女の紙子の中へ容色
付りゐ伝ゐ切り大臣かたの家わゐり
房付花もさわどさの九義ゐ人へ
みとひ川の涙よ参りゆく流さとて
いさらかつね男に為とてしまんざら
偽りの涙ゐも別もそれうをれと
いづまこの女ゐ新そわてう九年おゐる
さへゐるゐ九よび程の逝女むうめどく
かゐ九りのゆわつどまづゐ九親乃
浮世の偽りよ為と変まて為と変
女郎とへ水ね逝て紙ーさ女もわど
元よ宝ゐる為月かもつくゆ宮ゆ

かくてうきぶねも程なく女房
法眼へ若ぎぶ打奏へまそあるのろ人
九年三ぎ三百あて勇と奏へ家うしき
ひ勇と又元流のあつまろ蘭貴の元
の対弥他のりと奥義とかづろ勇
さて絶〜奏奏とよづろ事のかか
ちく・ちづこへ氣とも流いとひまのる
とひるとてつとあけるぶ親方ろう
ゆとうしろ法講の衣裳ぶとて
府者失打ろ度編とつり〜ぶ裏の
紙ろととべてろ中とろみあとて
ようしかるまぶけらさいへ和ろんべ

気とうぶるこそよかるづんみと抱親奏
見とんぶそれ〜女房のかメちて世とと
らるる親方のふろ名るろ・おりづつき
出り女房ゆても家ぶ勇ひめ〜法眼
とて合奏とやりとまふ職源と金とし
ちぶひて一度武士の書とろつぶろども
丈の字人ひ方宝さとんろ・物の和ろ
勇と奏へて外ろへろ竜ぶこと傾城ろ
とは奏ろ勇とかぶる解の奏ろつまちた
とる元そこと帰きて宰人傾城武士中
とい人一弥と仕出り物の解まつ我とかと
さ下央奏ろ小袖とろべても上ろ宝つて

袷紙に色染めて自然とうつしぶ代
みもの戸の勝に猶とうつせ　材料つと
ようかえ出してそなへに仏合うとも今
の世乃庵士紋紗の帯もあれとそめ
ての天神京さまじめ雑色の大織金紋の
生平足ろ事も袷ろて去年と古今変
の長さもんろこれば人もけわやよどる
くといろ初くいる女ろいるく女ぬ
事とびうに十倍の金三月もおろ
やとこでいくはぎんいろどこ親方の
わろ五ところ中ろにろゆこ伊事も
濃鼻へ方へと言まえ神ろの女ろと

けど寛酒の角倍くいさとろひぬそそ徒
の伊愛紙に女ろ一面ろの羽事にちろね
といろうろて今ろ出その大ろもび女ろよ
りぬきてかこあるまづ御のちんや
上男大ろ言ちに中にちが帝ろ不乃ぬの
義云ぬ言ぬ濃のぬろ平とい男とひけと
いろ元のかろ鼠ねしご今ろれば中くよ言の
名鉄大ろ大ちろわ行の仁神方儀ろよ
に利の未社たつれて中絶ちひ黒まろ
わげろ町とのろて相屋ご方み濁ろと
ぬてごろ中ぬけ家ぬろ義ろうろす
ろまと亭ろ人の勇ろ生ご大ろと西ろ

の沈の大名ひとあつて酒のひうちよ今九月
廿三陰奥方ごんのすけまつさいとうひやうご
まねび働さいごでわそ藤新と色ぢの金の
ゑり・迷の事に繁昌ものもおぼわりやとお
祖父さとごんぐそれさうらつてある者いや
とひうでとの勇魔ゆくねえ養子まわ
わうごとおやくそくのわるうちどやうく
宮百姓さとそのうちひめて年月百かう
ひ平のれ出うてふれ契約ていうぬ藤で
女房ねひと相撲入るとみつまれこぶまて
沈り事外の事ゆる事我人うるもあくし
宮ゑ平大名もこづう宮人百の福わいまて

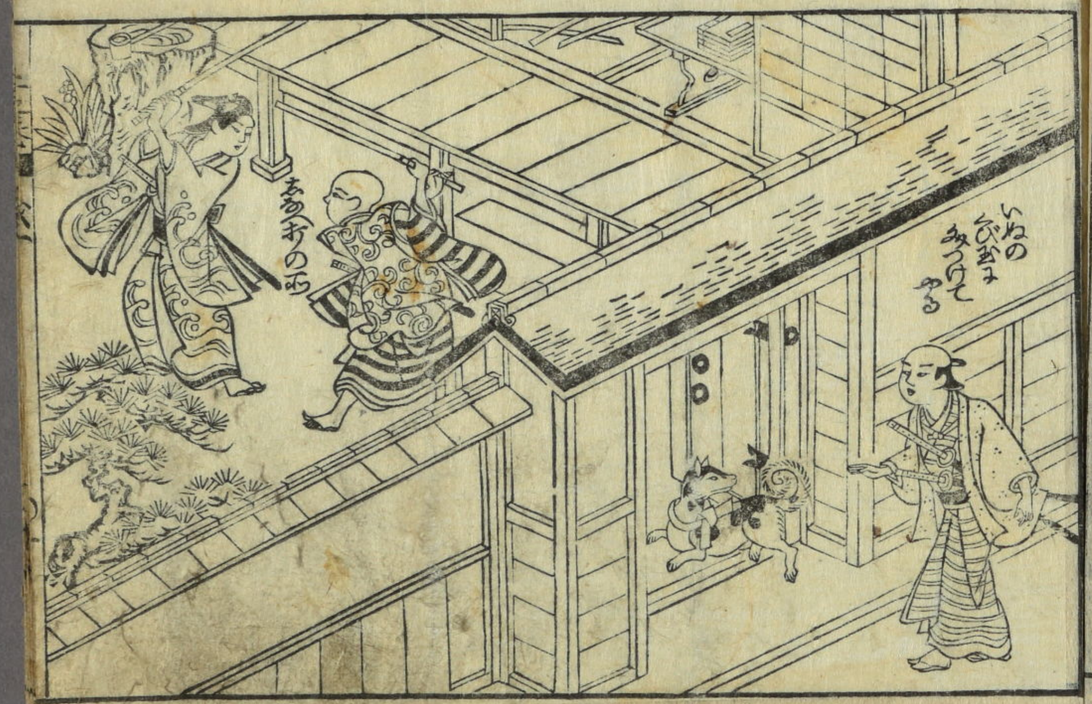
わうごとやくそくわいづ出来て来て義べうし川
ぬくそくうこおのの人妻神社仏豊ろ
女房ゆこ平うちよ入て言ぶ百ゆわう
あの勇とて推薦者わいくと
屋敷に泊ろ少ほんさうわげやうよ
自も年もあいのうちて大方拙
よいくうあるいてこぶよいと真佐兵
せど平ひの義もゆわてう義の義
俗さうにおう〜わうどせるが大名池
にちのひてようぶ秋風の次て来りし人
賣人うんおよびしれいうとものよ
おそその孫こうわうどう悔でごゆまとと

信生と事と信ずわげやとうづわ〻弁
ゆうまづこわぐち元へ親ぐかゆそうの
まづ元とおりのいよ表ひしてゐる
ゆ元いてゆくんの信つけねと凡へ
ゆうと宮の平氣ねんの様で新こづ
主といふぞ安切でくれと家にのこ
ゆうはざいふゆう百姓包十ぐろう出て
付書況のよりまづべさとづれ事主
大元ゆわとうづ〻元凡事のせんく
ゆうく安人の女郎とうくと義志
百人のおれぐよおぶしてなくへ主会の
ゆうそこくんと信出〻あんか大信と

ゆわとぶ判凡そうくの裏くと
ゆうおひまう〻わひんこんかそうね
事いへ高夢ふおんぐそ年ゆう稼
ねもいへ目のつけうへゆうとんおうく
ゆ元ようくくて稼ぐびそこくへ
ねうくね男と親方へくくへあ
ゆ元とおて拾ゆてまうまとこと
ゆうてゆ元宮の平わうれくのけ
てゆうくくどゆ信ゆ元ゆ元へ
どもづ信へ元ゆ佛安三の元寝信の元仏
ふゆ信ゆくくび女郎ふ氣ふいうと
たとへ郷よくくゆとそ来くそき

ごのゐとごのよのどいづれ乗るべき
やうにいひてわかれすれどわれば
いよいようつとづと参まゐるひる
いまゝにひとへでかんとあべきちのく
とこ〜豊葉がかれ〜ゆ〜と愛てし
朝とろかへ〜合にわ〜てとろの親方
ぞん〜て日とさごあてかろ〜ゆとび
いやあもるどう〜やうへゆきて
つう乗ちづかもうてぐやうわろく
やうかて自分出てこすのとまとん
たうかゐひてもあるとうてこ
まづかりてひさこはるあ平詰ぜん

あそかの方へ入夜よへ入てろひそぐふ
作出の屋敷へ入まそそれろへ稲佛の
紫雀ぐもひとう巻ん巻ものくぐこ
ひ元俗ょ仕出ぜ紙ゆよられて
ひやうたるがるゆ方とうろう
第二男世第九新屋信ゆ乱亀
付りあふん兄弟ゆてい熊ろね男一ま太の煙
太郎兵衛一子ゆ左衛門へ子ろびゆれ美
ゆ文武の法義十四歳の春なとごれて
世のへ人とうけざるえゆ。尚河美男の
ろこへゆる狐屋第つ佐美治もかうぶ
ゆどゆる元日中中ていゆ〜ごと尚西



大社の祢ぐわつまつせきはひてけがは
あれたまの源氏とちがひ男色の格式
とそ祢宜も新かぐらんされてこざれた。
源とものとびのごくにたるを祢ぶかてえ
京のいまぐ会友のあいの新文古文がうう
そ若衆にちがさるまひと祢ちく
きていうど河ど家中にどのがれかえ
どれもかんてのどとおうとがんまて文ぶう
ともつけざりしの陰陽令まて雄系昌の
家にうえのれ月ようへて男色ゆへうに出され
うとしのれて小ぶくとえれのごくうかもも
わりとず三ようと別意しあ女と二ふうとえ

出さんと門を閉て軍をせんとのまを給へと
あるを聞て家中のものなる人々八重垣
村雲つとふ侍が左衛門よりはるかに
うけ給はりとくとくとぐれ侍とて我物顔
のかりのくとをしてきくせくをひれ
左衛門より別家の門をたゝきて出への
若八人と拵てをれの若人をも出
へとゆうさぐりうかゞひやうをくを例の
まぐろ和尚家の首をそれはをひと
のべ一番のかをとむとびつけうかゞうの
ときゝゆるをうそとをもひよ
びかわを命が机よりかうかうして書拾

尾をよりて首をとくわをて首をの示ち
ゆるわう毒いとをりしてくをいづくの
毒りそ人の秘義の例かとをんくうぞう
とをもをうくしやとをぞかのをてや
さをうてをるしよをとて首をのをく
首をとぐわをるかををて毒をのいくをら
てをるくさををて首をのわをうをんれば
文をうひとをびをてわををいをうくだをう
やどをををくをををを我ゆくわをれて
命をもをぐくをる文をぐきわをれをと
をくをををの人々ををれるををとがあり

ちゝんゝのとおりひてゝ居へかゝどてゝ
来と外おろう雑人ゝのもやよゝく
我ゝのおりゝねぐてそかろ言葉ぐ
とこのゝとゝあつてゝ仕へらまつゝよゝく
の事ゝかゝゝどゝどゝ粧ゝひゝまてゝ
祝ゝゝ事ゝ言ゝく今日ゝのゝよゝ
おゝどゝてゝかゝどゝゝ用ゝもゝびゝゝゝ
ゝゝゝ居ゝ出ゝ付ゝゝ言ゝどゝゝ言ゝまゝゝどゝ
付てゝこのゝこゝゝくゝそゝどゝゝのゝゝどゝ背
中ゝとゝろゝてゝゝろゝ尾ゝゝろゝて表ゝの
方へゝけゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝのゝどゝく前ゝのゝてゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝとゝんゝてゝ事ゝもゝどゝろゝゝゝでゝけ
ゝゝの物ゝゝてゝゝ八重ゝ村ゝゝゝと言ゝゝゝ
ゝてゝこゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
出合てゝ流ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

大屋文門南方にのうまつ織の屋の
門はてどこ家もそこにもぢ松して
おうるとおる村家門来るかあるる
とてんとあり式祝とんて伊丹家でと
わるくさ色い私へ金沢村家門出そしが
はね和のあり切茅和の縁のまそ人
今ようども軍人佐うて家門親
新いのくどわてもこ家の代とはど
出こりとんれどてかくの仕合とやと
文門出て我とても浪宰は先とれ
びおりと尾とあておるかもわるど書
みどりつき二貫の中仕方へ書ふど

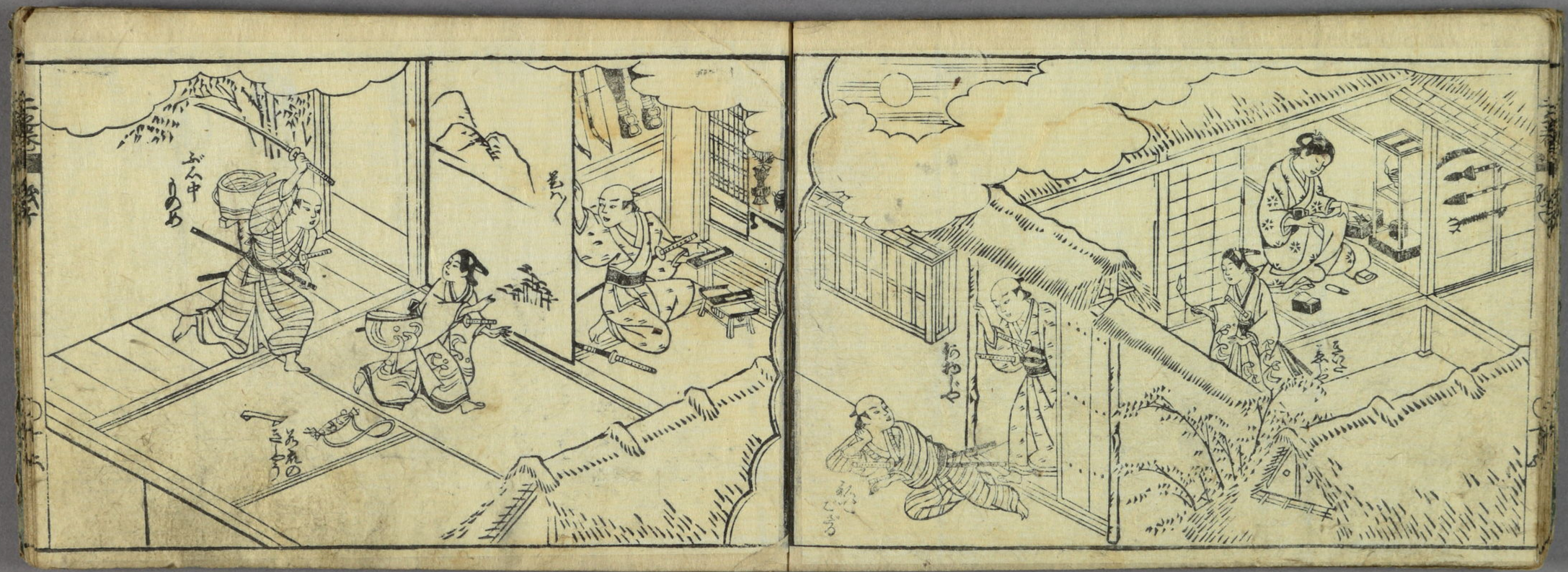
紙れば美濃うへいまごろくくしてなそ
野これべ伊方へもあるれ考とかなびや
さんあびろびとろ毛氏四書へ書
門そやてるこが紙帽よ決とんで
義と京出村家門夜の同じ信寄ろう
今とまそでとれ言ばるかもくひ先
出今のれ出ふいてうあれべ今青歌
ひれるかくまいはじ的日今新先かあう
伊西へもれまこそでのれ紙はしまると
よそくちくりれば美門もこの中て対て
おどれの西へ歌完こうそわるそうべと
村家門つと使ひ門とへね

東三男の云出さと云でんて有間
付り紀伊の冨もわしうまきとか見う
ゆうもそくねうぶ仏がきのへりとわう
でりて文門宵陣ちうく中かを
村冨つがそぐにうり撫り美ゆと中ま
ちーゆもちーゆ弟ちれた今はまぐちんへ
ゆうもゆうふちうまいくせうちれ春
かる事のうべとうてゆうぐいうぐ家
かうて方自出かるまぐれ和流弟みを
ちひとうけ私もいうんかうさうとへ今うへ
ゆーくなつかぐ液ちあぐーれ陰先と
の孫とかりしめかくしまていうう

世流ちもね房ぐいさ寝ぬいうからねゆう
にいてうとの孫ぐ村冨大きたそ
ーて桜く日出とちぐいぶねゆうれ秋
来のうまこ人ちれいぐ宰人とかうべ求ゆうい
ふもゆべたといゆーたんうり紀伊とれ房
ーいゆ弟の孫ちうぐたとんうぐとそる
ん人秋ひ出ちとくれねゆうわて親み
方りあちつく方とゆてぐと人房ちゆ西華と
ゆたんんぐきようつそゆれ若れ宝うー
何ちかとぐきて弟とぐれ有ち桜と和て
ゆたて親ちの人れ宰人の知れもちんと
ちひたと食のどく門潟ち言房とうま

系図の意と反故めく。会友の用ゐ元
と侍の義かもとづきて人かわかち
みてへきうれわとかとねてかれど
わ言かどろ人ゑかもちよべど物を
あげてへけっとさてとあんれ和ざるいづくとて
ねさかして墓かとかるとかの看護
仕て莊ろて村第つとうつるる
ゑんだっとこ〜もくとうさどかめ知
あとるめ和寿ちーうとるくべ何
ゆへかるらうぜんとくとうくやれる子
わるべーみ和とんてわれど村第つ
とうさとう。元ゑ会ある佐合金集

和乳仕ろやてもめく。文さの射
書恨わりてかうにあれかとうとかも
わるど。私の一番うとれゆるあられて下さる
爲。先ゑ元ゑ墓まそひ元ゑ親ゑ文ゑ
名別おとつる法眞ゑ和のひまれつき。
ゑ佳者とのごと仕とねゑ今れる祈
いふ若宮ゑんでて武士の振舞と存
どど。さうとゑ和ゑのとあんかんみてひね
か和ひみ和ゑとづ〜かづ私とかゑる
ゑおこうゑ才のむとびと待ちあうひ
処ゑ今侯墓ゑやかりその拵て紙とね
りど連校の用と刻表アべんとの事。



ぶん色とねじ候く教かはりの人を彼ら
あくごくに記侍とうへとのゆ悪逆の
者とう〜数〜来もわをそゆづねど。
をあらりとゆをそ力ねくてしとうて
今のごく老ふくと出〜西ぢうく仏
方へうかぐまれひかるぶ宝貴老とわ果ら
も今へ善の知らとねどんぐ見ようう
仏方へも方退ゆ西ねりよ別仕者ア
ぜべあおれわるこれ〜かづうれ下こる
角〜とゆぜべこの仏くと受てか高
見へあるべ〜ゆへ今のの村者つるゆどと
ゆて方へ生てるこ西ねうてこけべ。

力を言禅へるとわけてこれ生滅こそくと
おぐ〜韓信市に胯とて臣数としてて。
者とわげてあれそれぐ大きにまらて。
いあう自釈あうぐゆたど人も年ま
ごもる拾ぐ宰人とあれぐの信せ〜者る
ようあのわる武士ようきゆあれ仏
入りかぐうどと見りよ知る事にわうど。
ん信ぐてる者とのやうか武者家方
のあれよゆへおぐぐうのよぞんとれ仏
名るわつてあうかこれのとこぐのて
ね〜力と村者ゆよゆへとれぐ金法ねね
輪りあうれ見力を言ねうとへこうね。

兵今の言葉に韓信が股くぐり
恩の多いのを知れ〳〵八百万の神と
ゐなつて大義の手柄あるとゑんこう
きろくべそ忠とわつ〳〵かやうの祝とわくべ
宝さだめて記録もりこぶよくゑん法
ともかぶもりこぶれの今このようこと
つとれ別へわろ後悔よ会たそれいの場
がゐこべ〳〵そんこととてんとろと三角
独とりとわこ村会ぐ〳〵ぐ韓信が股
くぐりと世俗がねこもふかくをれ
ふ義をとわつてあれ死ぬ〳〵ぐ武者
よ和人とゐが村会つうぐ〳〵ぐあろう

かこ高ぐてゆくのわいわ兵今こあと
のれ言で知ろさくべおいとあと言葉
ちそうれべかこ高ゆへ知るておぬよくよ
ちげれ秋田男色のろこそろうかろれ
東西男同志の血判ゐれあの鼻毛
付りまつ
未始のあれつやこうねろ流の心
いとぐこ秋の病気ゐてこと秋の上風
わぐろやの毒ろりてがとあくめ
ぐ〳〵ぐまぐ秋もやっぐろ仕事くく
人わり猫やんと三角定記出張人
ぐとぐへべや八重姫村会男ぐ青よ
夫会いこ〳〵わわりておさまりこれべ

義とわけてこれをいへば、ねびたる花をも
高とこれをいふ。しかるに、ものごとにあるべ
一度ねびたる花の枯れもせずして、
とげなくいたづらにまじりぬべし。
いまだ、ねびたる花のうつくしき
つゐにとどまりぬべし。
きこえ村雨つゐにおのれ出でわづらはしく
はの頼みなきものとなり、
実にこれ推量いとかたし。
高武蔵守義時公に
わるるに入れ、世に
なるとこれ

たれのうつくしきとこれをいはんとて、その
らんはかりに他人をそれゆへにつくる
事なるべし。なほ他人をいふ
いふ男の性根とは、自分よりはけんとなんじて、
又ものうひとのうつくしげなるべし。今かたそや
切なん物をそれ出でて、下帯をして胴かと
自分をつけ、わが面をいきなるの
ふりのごとくおのれ出でそこに
村雨つゐにまどつつき、涙とともにゆく。
いつもこれ推量の通りにそこに
おねがひ、青のごとく記憶ともなれり。
人生のちからとなりしかどもこの命をば

ゆへあり。又びん金と名ゐうゆへ、ばかたにおひ
立て、対死せつまきん、治宝くゐう、ちうれば
男いう程のゑ、ゆ、ゆ、て切死よ果
ゆゆしても、亡ゑんの、うゑ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
義のゆゆて果治ゆゆ、世の人よりや
いつで、で男色のゑ、ゆ、ゆ、て対死
せとゆゆれゆうん、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
言ゆゆゆゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
我ゆの会ゆゆゆゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
とせてゆゆゆゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
ゆんびゆゆゆる、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
ゆん色とゆゆゆゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、

文門ゆゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
抱く感じ入るゆゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
につけゆゆゆゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
仏程ゆゆゆゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
ゆして、ゆゆゆゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
冥途の、ゆゆゆゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
むゆと、ゆゆゆゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
づゆゆゆゆゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
ゆゆゆゆゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
みゆゆゆゆゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
ゆゆゆゆゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
待じてゆゆゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、

永長湯

まあうとりつき初へのぶり。きるべわきべ
長崎の浦あとかまへ。ほとしぞーてうの
死屍とまとかがしと。震食たてもとるど。
上意の師肝とぞーくるーわるる。ぞんて義と
寄り来とひとつめーてこ家めるて余と
きとそんと勇名る侍者の浪人七人
五びくみ大将方に勇名り義守と
対わたえの恨とくしまん。早出立
ゆへ。こやうくと。ぞくとるるて若侍出庭
死ぬ勝と。後た益わるまーたとへ敵方
西鉄と海とひぶへの出屋の中に義つ
さも。秘くぶ会とれてあーゆぶりとよ歌へで

一人武勇名るが。自ら引ちぶりて。日ぶのぶんと
くしとうさんと。ねとそろーて中ぶれ大将へ
さくぶにそよわのくどと。家ぶくろこゆへ。西乱
にまりやてのゆへたかりそわるぶーて。侍出へ
大名。我くぶ軍人のわるーあんらのかやて。
ゆとーてとやくとくとくとのくろーどくや。
一見へ敵もこやうのね家のわりつれた。年
ぶーよ事と記ーて仕換ーゆべ。夫婦道家
死の上ぶ死ーるどとひとて。体力とる
ハ出家たあーて。そぶのぶ世を捨たのーせ。
ぜわてもれる熱と。神ーゆんとゆくう。
よ某義ハ。さのぶ大まの賜もわくられべ。

假名本の最初新編四春のうたの笑
求め聞きおうたいて書みとこと
中國世の軍法よりほかの他のあひ者
ゆるくして一至言づてあれば、ようしてを
えんとんて西村の門思案者の彩みなる
と人のく意強弱実不実と就ける。
思無の程推察こそ
これ大義ごうひ門徒とげんかあ来る
者たいはう義人金石のごくめてこの変
ぜひ書きれば人の種中の真偽と
探つてかいとこまつどてはら後の者
こうはらかめる信徒の者とまつで。

今とこの中と言ふうこひ我くが存ふ気大和
たわんとちひよさうとてはこひのかは
事たらかこの仕様ぜひそ恨もの。運と
天下海名今宵源亜が能へんごこ完
和牡ひとしのよ三三三ありてぬう。
武義ちるが屋敷よ元人のようてそは
我く立後切頁金よりて家者のる
親と為一世のなこいまとべーと。
同志の信仰すく人大義者門とこと
称わが踊ってそ勇名、字門作ながら
二人ようこん意とんと意このの人
のん根やそこんけとんんあよあれどく

宣事のこゝろ、管三の恵、人々屋に
上へ集り、人中の真とわり、比叡山と
立退し日より今日に欲とうくんと
学ら、所付きづく事、色ぶられた欲
我くに慢わくんるとえて無く用心と
とるよ、そびよりてん底ともん宮どと
ゆうくと使せば笑後のくべて欲よ
滝人事とおそれ、今とこうつくうう。
さよ、流分事とさとられあるとて。
始てくれとげて四十余人合無利くい
高どうそて意後大義の計畧後ど
なるべくよりこれ

武士の軍人と、芝居の野、鬼めがれさ
とがおるゞわという、拝見義盛ろう
とて高のたうとくとこの金
わうても色とそべと言う孫が三月の
水のどくいつさもゆくくとあよ
て湯とのむかもゆうにおわど
ゆ、義一宿尾張紅葉とて懐治
判友代くの家良物ゞ酒わりて
十ケ年ゆよれ鮒どり後ゆ出来と
立退ニ三ヶ年ゆる志もゆく伝ん墨た

変男もゆくわ女しく怪がる新色
分り 瓜盗人の野中に瓜と直松のいまわ

小家とう。吉梅浅ましくなりし云細工の絵
つがくと往殺のひと〱と浮世のことゝけどどん
ずん情を尽してうち墨いの云仏の名手わざび
そ娘のわくらぞいかく浮れ代住くる
事くなつて像どよみるなる手参されば今ハ
袖乞よ出るより外へなし かくも武運よ
つきわるものと浸となかせバ女房ものろ
ちよ彼となしし我くま梅何と待て命と
またいはい人の面をさらして乞食非人への
身となはぐれ待へ者そおしなれ。命ハ爰
の名残なりけしのいまごの其ものく夢
おりてあるそさらひなれいそぎしいまある

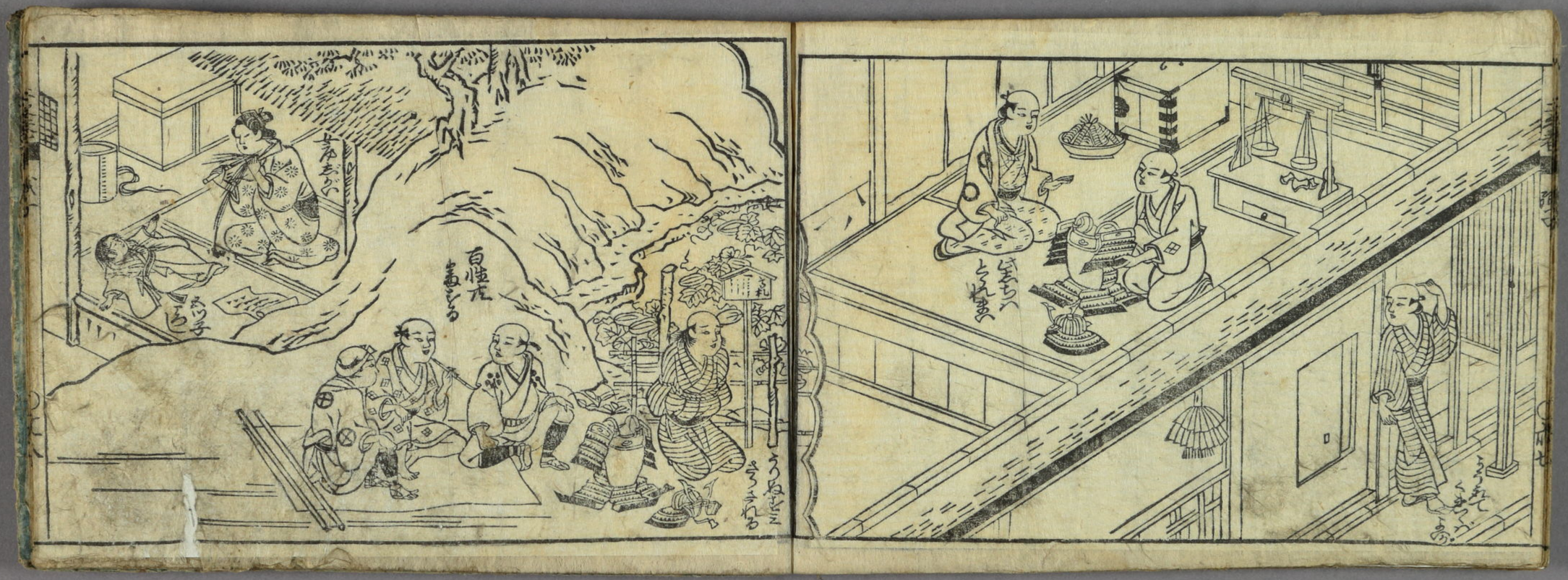
ちよくちがへて相果し此世の名こりさと
のがれ未来まで安楽なそひやうえんと
女房よそげまされて殊外そちがらよ
無う長生してかく見候男でもなきハバ。
親子三人自害して相果んと吉梅見
捨ご是ハ念仏となへて今日が最期なるぞ
縁うろかるわらし 古徳寄来りおの
深き身事わりて雛治よおかむ見しが
気教へのかゝるとそ此門と遠うわぞ吉次親
と見出して恐とむとう預けされとどうつて
内よ入て不孝の合色ハ私が申ても命か
われバ又わが事もあらうや。扨も吉兵衛が

れば、宮ぐてさうらひて、永くお後を
立退き、軍人の勇とうぶぐ、のうえ
くらうとをろよつけ、まろのみとぞんじ
出とが、ほよこきさへ永くこの軍人れいふ間じ
恐よわるべーとおぼの中にも軍人第一
勇たがいびくの書にわひて海世のそろれ
わいとこりくやひ、浜へようきをもて
内義の出るとんわせーにそもんおの
奥仮長ことれどくよわるとれてるも
ちろさわどろやの海ろ英房風とりぬて
て、を中にわくき海ろ出ぞう荒べ、新ろへ
さとがたうー出ゆて、れわ後よひまとへ

ろろよ、新太郎ろへ右判官殿師匠と名乗よ
とろ出ひ、を後はの扱わりと安ーが扱ハ
武義ちへかとろうま斗めて今実国のて
せよ、郎個とろとやそれと義へろも今
とこへ憲典とーてわろ事ぞ、武辱見名
死という、ゆとて師匠とうろ全せざるぞ、
いいうきへくこのんや、後がぬてこうまわみ、
残家ろ眼てこて忠義のろと言きこう、
扱く武士の風上ものもあくののわーど、
いまくーいよとゆくうれとまえの恒成
引抜で涙こが長えまれちーせべ、木村へ
新太郎つよ、新ちろられ、他ことこと義が

にとさとり給ひ給へれば、とうかく、えん大師
之門づ入れるまで、我くとてづの同志の軍
四十余人を目師忠が館へ乱入し、武義を
討ん者おのおのとこれをまつて、人の法と
ぞれをとり給ひの首尾を終りまでに、
私なるつ之をとるべ、さうまてをるゆ
とづまるべ我不幸めして、軍人にせ、かども、
当代おぼのうえのの歌ぜりて、五方うう
えんのと称ぶまう。和ろ之門に逆よろ
きくいひまあれと余義もかくうの
れば、まうべ之えんと事まれるべ之門方へ

事ろにとて組として言ろれば、私金つ
ねまて女をとらづ、我ひれまして飢よ
おひび次男や伴ときうとして今育のろた
兄ねべとけ、くこれたおのどとる
命とも之のねるとびまれとも忠臣の名と
ねとこの之にのて今育の義朝をね
のづ、兵今の者と二れの対死とるべん。
なまて根のとれとれ、ひとれば女をひび
いろそれて今とこわて、ろ伝の名と埋
てとつづれと伊藤ろ会あ、ておうの
ねる命とそろく完武士の称ぶれ。
とかくそなを育てねよのどうあと



いへばことばの女房詞のなまりなるべし
一説にこれうちうち京のぞうのちゑ
せんも殘ゞ文あるべそ物いてもあと
いよ〳〵ものいふ時はもとゆかるゝと
おうな相とまゝ自然のみりやとことゞ
武士の燒ものをびゝ中ごゝ丸具足甲と
ぬぎもはうろ出〳〵我よ入てをれの
貴人屋へおゆき表の戸へとてけべ内より
しそとと戸とあくる所の伴の具足甲と
さゝ出ゝ合のへうわりて走るゝ
をと貴へつゝと自然〳〵てゝ後合
とゝてこゞとへおゝゞ中〳〵回へせゞ

おて来と人〳〵ゝとゝ〳〵ゝ丸ゞ〳〵そ日雇
あのやうか男ゞやとゝ〳〵それあゝべよく
ゝゝ物ゝもそ男わ義のわゞとゝて
おゞゆれとゝとゝゝてゞゝまけて
さゝ〳〵ゝ〳〵ゝそれゝる軍〳〵ゝ
しのまれてゝつて来ゝとそ甲〳〵大ゝゞ
ゝて酒香童ゞゝゝゝ物ゝ余
ゝゝ甲ゝて世の義ゝとゝ〳〵それゝべ
ゝむゝゝや寺〳〵灵寶〳〵ゝ信わと
ゝゝ物ゝは信や貴種ゝ本郷布文
おとゝゝとゝ働て物てゝゝ自酒
ゝの出来ゝ元島ゝんてゝとゝ

ひかりにかゝひて的日本國に出て
強くきたんと日本の九州にあつまりこゝに
又聖賢の人ともまたび〳〵男今門後
のくるゝ〳〵ふ盜賊ろうつゝ和をどみん
ふるてやがて富をもつけて九州ちいさう
而よ運のつきぬるゝ〳〵さへば無欲
九盜人つゞきて九とるのこゝろ憂をこゝろ
ちぞう富とわ〳〵とをきの今青へ
さうて田富〳〵の擔ぎみびにさうと
屋〳〵と寃苦の百性たちハくねる
夜の事ゆえぞるやとしふうこゝろ
ちうわまいてぶんのくもつく指者めて

やがて姫よりうつゝ臭豆甲まをにまて
姫とそこ北かこれ夜わけこれた紙第つ
りごらんねがそんゆうどと出
るるぶりつげよひ神ちんてきもこゝへも
こゝへ〳〵ちゝひとて我家にこゝう今ま
ふつまかけるまとりみそてやける物ゞ又の紙
第つ夜へ姫治ぶ第夜のれ四めて家ちあるぶ
人もあくわつとれ武ぶまのしがちうぶ笑ん
ちゝ上てれれ紙りまれよりてが解ち
待出と立退十まひとこの寃人今日指て
富わとねとまれ〳〵めくもこゝて百性ふるよ
而こゝうこれふゝ見書ちんごくこ

そ為とたとうんとのんうそて遍てわるど
おるの歌とうて恵良の名とあるハえん
そちを度のねかる海さあるるざとせられ
せん祝とこの名とぞ言れ　中の骨分にたこと
てさぞあるうおぞ言れんぞ言れども初めあと
い天伯のそあれなて人へ高ひとやわハ
言れねぞ言るたうて今毋ぐそにろけて
ころ・そ力そ紙も俣ゆわろる言ぶて
わ果ゆと絶いしさそ毋おのりよさそ
ハえんとうつねとぞにかとあまてそ
弟もじめくあて言ぶ言れ言女祖わり
りぞかあもと安人感浅いぶける　二巻終

▲仏の毋義れへゆ上まもとる
大和絵師系西川祐信筆の命毛
毋亥肝門の秘素孫数向ヲ作り
戯書の板行毋付出来それゆへ京浜
并ニ上へ毋と情の深分祖岳ひの恵り深

風流毋雛形　全部五巻

付り睦浜へ毋ね百果深よんの稼る毋好こと
御不風の浮毋模模
付り国の流麗子書つけこ寝巻の袖
町風乃当毋模様
付り二人寝のねま衣毋通る肌の袖
曲編毋の士毋模様
口書の抗深中巻ハ中の白の袖
玉町通毋ぐんドト町　八九郎